

2022. 12. 4. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書12章49～53節
『もたらされる事柄とは何か』

昔、日本にキリスト教が入ってきて間もない頃のことですが、一人の熱心なクリスチャンである嫁が、同居している姑を何とか教会に来させようと良く仕えていたそうです。そのかいあって姑も重い腰をあげて初めて教会に行くことになりました。嫁は大喜びです。ところが、その日の聖書の箇所はちょうど本日の箇所そのままでした。姑はカンカンになってもう二度と教会へ行くことはありませんでした。笑うに笑えない話ですね。

わたしたちの生き方というのは一体なんなのでしょう。もしも見ている人が誰もおらず、野山でひとりぼっちで暮らしていたら一体生き方とはどんなふうに変っていたことでしょうか。良くなるか悪くなるかで考えてみると、おそらくとんでもなくケダモノに近い生活を営むハメに陥ってしまっていたに違いありません。

実はわたしたちとは自分のまわりに他者の目が有形無形ににらみをきかしているから、なんとか現在程度の生き方をしているに過ぎないのです。人のためにとか、信仰的にとか、神の前を生きるとかいろいろな言い方をいたしますけれど、結局は人の前を繕っているに過ぎないのです。この事実を人間なればこそ当然だとタカをくくって生きる人もいれば、このことを人の持つ負い目として厳しく受け止める人もあります。しかし、この違いは決して小さな解釈の相違ではありません。これこそ信仰の有無を示す違いなのではないでしょうか。

本日の箇所でルカは終末論の裁きの警告をQ資料の伝承語録から一つの集合体として編集しています。「わたしが来たのは火を投ずるためである」(49)と描き始めます。「火」とは裁きの火であり、イエスの到来を意味します。このイエスの到来によって初めて終末の出来事は現在化したのだということです。

つまり、前述したようなタカをくくって生きるあさましい生き方が終わったのだということです。もう迷わなくて良いのだよという呼びかけなのです。そして、そのような生き方に終止符を打ち、自らの負い目(罪)をおぼえて受け止め直す新たな生き方が示されて行きます。この新しくされた生を終末論を通してル

カはわたしたちに「もたらされた事柄」として明らかにするのです。それが「使命」なのでしょう。

「使命」などというと近寄りがたく感じてしまうかも知れません。けれども使命とはそんな大仰なものではありません。もちろどこかのだれかから命じられて成立するものでも、自ら買って出て担うものでもないでしょう。

使命とは、わたしたちが生かされている日々のなにげない生活の中に誠実であろうとする構えが、おそらく自然に見つけ出し、やむを得ないこととして担い、そして果たして行く事柄なのかと思います。それはわたしたちが積極的に何かをするというよりは、反対に担わされる受け身に似たもののようであり、決して逃げたり、ごまかしたり、避けて通ってはならない事柄に対する誠実な姿勢なのでしょう。使命を生きる人には、そういう受け身の誠実さから醸し出される自然さがあります。そういう人は、自分のしている事柄を使命などとは考えもしていないでしょう。イエスの十字架と復活はそのような使命をわたしたちにもたらしたということを感じと共におぼえるのです。